

チナ地方通有の岩上土淺き地に落ちて直に枯れ、或者是棘の中に落ちて蔽はれ、而して唯少數の者のみが沃地に落ちて三十倍六十倍又は百倍の實を結ぶといふ、即ち之を一言すれば福音の説かるゝや其の實を結ぶものは決して全體に非ずして僅かに其一小部分に過ぎないとの事である、之れキリスト御自身の實驗にして又後に起るべき事實の預言であつた。

然らば其沃地に落ちたる少數の種は健全なる發育を遂ぐる乎と言ふに、然らず、其中に稗子が現はれるのである、稗子とはパレスチナ地方に生ずる「チツアニア」であつて結實前は眞の麥と區別する事が出来ない、故に農夫は之を引抜かずして收穫の時を待つといふ、即ち少數の麥の間には偽はりの麥が生存すべしと、之れ第二の預言である。

次に來るものは芥種の譬喩である、此の譬喩は通常福音の膨脹力を示すものと解せらる、然しながら注意すべきは茲に來りて其枝に宿るといふ「空の鳥」は同じ本章の中に既に惡しき者の意味に用ゐられしのみならず聖書の他の部分に在ても亦同様なる事である、或は「空中に權威を握る者」といひ凡て惡魔は上空に在りて人を狙ひ恰も鷹の小禽を攫ふが如くに人を攫ふとの思想がある、故に芥種の譬喩も亦前後の關係より之を見し寧ろ教會の俗化を表すものと解すべきである、而して之れ事實の證明する處である、キリストの教會は初めは微小なりしも次第に増大して遂に羅馬帝國の國教會となるに至つた、嘗てユルセピアス羅馬皇帝の卓側に坐し一座の光景を指して曰く「陛下よ、約翰黙示録に所謂新しきエルサレムとは即ち是れなり」と、然しながら教會の斯く増大して空の鳥を宿すに至りし其事が最大の不幸であつた、空の鳥とは何ぞ、惡魔彼自身である、前には福音の種を啄みし者が後には自ら教會に入りて勢力を振ふのである、而して教會は惡魔を迎ふれば一夜にして増大するのである、之れ獨り歐洲に於ける事實のみではない、我國に於ても亦同様である、教會は芥種の如くに小さく基督者は必ず迫害を免れざり

しは近き過去の事實であつた、然るに今や基督教は此國に於ても一大勢力と成りつゝある、富豪之を迎へ政治家之に近づく、基督教會の牧師が總理大臣の許に出入するが如きは果して何の徴である乎、噫空の鳥は既に我國の教會にも來り宿つたのである。

第四のバン種の譬喩は如何、バン種は感化力を表すが故に此譬喩は福音の社會に對する感化力を示すものと解せらる、然しながら單に感化力ならば其反對も亦事實である、否ひしろ惡魔の感化力は福音の感化力よりも更に顯著である、故に此譬喩の意味は他にありと見ざるを得ない。

茲にバン種といひ又婦之をんめを取り云々といふ、聖書に於てバン種は常に異端の意味に解せらる、キリスト自ら其弟子に對し「汝等バン種を慎めよ」と言ひ給ひしはパリサイ及びサドカイの異端を慎めよとの謂であつた(馬太傳一六の一二)、而して又聖書に於て婦と言へば大抵惡しき意味に用ゐらる、ヨハネがテアテラの教會に宛てたる

書翰中「汝は……婦イエザベルを容れ置けり」とある其の婦人は言ふ迄もなく甚だ惡しき婦人であつた(黙示錄二の廿)、加之古來異端は多く婦人の作出する所である、現今歐米に於て勢力を有する基督教科學を創始せし者はエヂー夫人である、靈智學を代表する者はベザント夫人である、再臨に關する異端第七日アドベンチストの開祖はホワイト夫人である、而して是等の事實の暗示する處は能く聖書の言に適合するのである、依て知るバン種の譬喩は教會内部に於ける異端の出現と其感化力とを示す事を、俗化したる教會に純福音は迎へられない、茲に於てか新神學者なる者現はれて俗物を喜ばすべき異端を唱ふ、而して信者皆之に感化せらる、教會の俗化時代に次ぐものは異端出現の時代である、是れ古今東西の教會歴史の均しく證明する所である。

然らば福音の前途は全く絶望である乎、教會の歴史は悉く失敗である乎、否神は此暗黒中に更に光明を投げ給ふのである、教會を擧げて異端に心醉せる時神の選

び給ひし少数者が隠れたる貴き寶を發見するのである、腐敗したる群の中に尙聖き男女ありて此寶を發見し得るは實に感謝すべき恵みである、而して此事も亦歴史上の事實であつた、多くの註解者は隠れたる寶の譬喩を以てルーテルの聖書發見と解するに於て一致して居る、前四個の譬喩に就ては全然別様の解釋を取る學者も此點に於て一致する者が多い、隠れたる寶とは何ぞ、聖書である、神の言である、教會内に俗物跋扈し異端横行する時隠れたる聖書の發見があつた、而して發見者は之を胸に抱いて喜び假令教會より破門せられ身を焚かるゝとも此貴き寶さへあれば即ち足ると做したのである。

若し寶の譬喩にして果して聖書の發見ならん乎、次に來る眞珠の發見の意味も亦之を探るに難くない、寶とは寶の一圓の意味であつて函又は靴等に藏められたるものと見る事が出来る、然るに眞珠は一個の寶である、即ち一圓の寶の中更に貴き者である、始めに寶の發見あり、次に其中の更に貴き眞珠の發見がある、聖書

中の最も貴き眞理とは何である乎、贖罪乎復活乎昇天乎、此點に就て我等は獨斷的であつてはならない、然しながらA・J・ゴルドン等の説たる眞珠とは再臨の眞理なりとの説明は悔るべからざる思想である、再臨を聖書の中心的眞理と信じて之が爲には自己の一切の所有を放棄するも顧みずと爲す者は少くない、寶の發見に次いで眞珠の發見がある、斯の如くにして闇黒の教會に光明は臨むのである。而して最後に網が打たるのである、善も惡も一度びは神の前に出で、火に燒かれ其價値を驗さるゝ時が來るのである、眞信者も偽信者も最後にはキリストの臺前に立ちて大なる審判を受くる日が來るのである、聖書は近代人の考ふるが如き進化的審判を説かない、教會が徐々として發達進歩し遂に全世界を包容する黄金時代を實現すべしと言ふが如きは全然聖書と相容れざる思想である、聖書は明白に善と共に惡の成長すべしと而して最後に審判の行はるべきとを預言する。斯の如くに解釋すれば七個の譬喩は全體として一貫したる大眞理を教ふるもので

ある、福音の種は蒔かるゝも之を受くる者は少数に過ぎない、而して其少数者中に更に偽ウソの信者が入り来る、斯くて教會は俗化して富豪政治家等に近づき神學者は彼等に倣まねりて異端を唱ふ、然れども惡魔の子等の間に又神の子現はれて隠れたる寶及び眞珠を發見し依て死に瀕したる教會の復活がある、而して後に最終審判は行はるゝのである、故に馬太傳第十三章は一の大預言である、其中に死の半面あり又生の半面あり、暗黒あり又光明あり、神の深き眞理が明白に傳へらるゝのである、而して獨り本章のみならず馬太傳全體然り否聖書全體然り、聖書は個々の言を讀みて其意義を誤り易くある、然しながら其全體を讀みてキリストの精神の存する處を受けん乎、我等の靈を充實せしむると共に又之を寛容ならしめ深さと共に廣さを與ふる事此書の如きは他に無いのである、聖書研究の秘訣は茲にある、是れ實に何物を以ても代ふべからざる貴き事業である。

附 録

平和の告知

路加傳第二章十四節の研究

(一九一七年十二月廿三日柏木聖書講堂に於て)

本年の聖誕節クリスマスに就き顯著なる一事がある、ベツレヘムの邑むらの上に絶えて見ざりし十字架の旗ひるがへの翻る事是れである、こはキリスト生誕以來嘗て唯一度ありしのみのも事であつた、彼の生誕當時パレスチナの地は既に羅馬帝國の配下けいごにあり、後つゞいて回教徒の手に移り、爾來久しく聖地は異教信者の蹂躪しよくに委せられた、一〇九一年十字軍の結果一度び基督教徒の手中に恢復せられて前後百年餘り維持せられたるも再び土耳其人の奪ふ所となりて遂に今日に及んだのである、然るに今年今月十一日聖地は久しぶりに基督教政府の下に歸屬きぞくしエルサレム又はベツレヘムに

於て其軍隊の保護の下に聖誕節が守らるゝに至つた、是れ實に著るしき事實である、パレスチナの地が再び神の選民に復歸せん事は聖書の明白に預言する所である、而して其事の實現はキリストの再臨と密接なる關係を有するのである、之れ所謂時の休徴である、神は堅く其約束を守り世の變遷に拘はらず之を實行し給ふ、神は既に四千年の間猶太人をして此世に存續せしめ給うた、而して今や亦其地を回復せしめんとし給ふのである、世界に撒布せる千二百萬のイスラエル民族が再び父祖の國に歸るの日も決して遠くはないであらう、かくて神のアブラハムに約束し給ひし所は悉く實現するのである、而して之と共に主イエスキリストは再び臨み給ふのである。

イエスの生誕は之を地上の出來事として見て極めて微小なるものであつた、布にて包まれし一嬰兒の槽の中に臥させられたに過ぎない、然し乍ら之を天上より見て嘗て宇宙にありし最大の出來事であつた、此時實に萬民の救主が生れたのであ

る。是故に天使は牧羊者に臨んで大なる喜びの音信を傳へ衆多の天軍は現はれて天使と共に神を讚美して曰うた、

天上には榮光神にあれ、地には平安、人には恩澤あれ、

と、寔に救主の生誕に適當なる讚美の歌である、天には榮光、地には平安、人には恩澤、何の詩か之よりも美はしきものがあらう。

然り語は極めて美はしくある、然し乍ら事實は如何、事實は果して此詩の如くあるであらう乎、天上の事は暫く措き地には果して平安がある乎、否此美はしき讚美歌の歌はれしより以來未だ嘗て其語の實現を見た事がないのである、イエスの生誕と共にヘロデの迫害は始まり二歳以下の嬰兒は悉く殺されて家々より悲痛なる叫びの聲が擧つた、イエスはヨセフとマリアに伴はれ隠然埃及の地に逃れた、爾來人の子は枕するに處なく而して其最後は十字架であつた、之に尋ぎしものは使徒等の受けし迫害であつた、實にイエス自ら「我が來りしは地に平和を出さん

が爲に非ず、刃を出さんが爲なり」と宣べ給うたのである、而して彼の宣言の通りにイエスの在る處必ず分裂は之に伴うたのである、人の胸中に於て然り、家庭に於て然り、國家に於て然り、而して紀元の第九百十七年なる今年の聖誕節ほど地に平安の缺如せる時はないのである、今や全歐全米全亞細亞が戦争状態に於てある、殊に其基督教國がさうである、我等に對して幾多の宣教師を派遣せる米國の如きに至る迄國を擧げて戦争熱に心酔して居るのである、近頃米國の友人より余の手許に届きし書翰の如きは官憲に由て開封せられ檢閱済の捺印を施してあつた、かの自由と平和とを愛する米國にして個人の信書に小刀を入れざるべからざるに至るとは實に驚くべき事である、之れ正に北米合衆國建國以來未曾有の珍事である、又先般米國の或る教會に於て配布したる一小冊子を見るに曰く「此戦争は神の戦争である、昔は神自ら奇跡を以て惡を膺懲したるも今や之を爲し給はず、神は嘗て紅海にバロの軍勢を沈め給ひし如く今や北海にカイセルの軍隊を葬

り給はない、今や正義の武器は信仰に非ずして大砲である」と、然り今の世に貴ばるゝものは大口徑の巨砲である、ダイナマイトである、潜航艇である、平和とは敬虔なる空想に過ぎない、戦争なくして何の進歩ぞ、何の幸福ぞ、ニーチェは曰うた「或人曰へり平和を好む者は福なり、其人は神の子と稱へらるべければなりと、然れども我れ曰はん戦争を好む者は福なり、其人はオーチン(軍神)の子と稱へらるべければなり」と、ベルンハーデーも亦曰うた「此世に於て最大の善事を爲したるものは愛に非ずして戦争なり」と、此時に當り地の平和を謳ふ者は誰ぞ、そは空想としては好し、娛樂としては可なり、然れども實際社會に對しては平和の聲は何等の權威をも値しないのである。

人には恩澤あれ(又は人の中には好意あれ)といふ乎、之れ亦眞實に非ず、今日凡ての人の上に神の恩澤ありと考ふる能はず、人相互の間の好意の缺乏は勿論である、却て其反對が事實である、見よ英米人の獨逸人を惡み獨逸人の英米人を咒

ふ其心の激烈さを、彼等は基督教は愛なりと教へながら自ら悪魔の心を抱く者である、詩人ダンテ其神曲地獄篇中悪魔を描いて深刻を極む、即ち悪魔は絶えず六個の顎を動かしてイスカリオテのユダ、カシアス、ブルータス等叛逆者を噛み又常に六葉の翼を翻して冷風を煽り之を世界に送りつゝある、而して此風の吹き到るや人々皆互に相悪むのであると、詩人の歌ふ如く憎悪の念は實に悪魔の吹き込む所の精神である、而して今や全世界が此精神を以て充されて居るのである。されば「地には平和人の中には好意あれ」と言ひて全く事實に適合しない、否世界の過去及び殊に其現狀は却て之が反對を證明するのである、「地には戦争人の中には悪意あれ」である、而して實に天軍の此の讚美歌を以上の如く譯するは正譯ではないのである、是を原語にて讀みて明白なる他の譯を附することが出来る、

曰く

いとたかきところ

天上には榮光神にあれ、

地には平和恵まれたる人の中にあれ

と、即ち知る天軍の歌ひし題目は天地人の三に非ずして天地の二なる事を、また平和は萬人に在るに非ずして恵まれたる人にのみ在る事を。

然らば所謂「恵まれたる人」とは誰である乎、茲に「恩澤あれ」と譯されたる原語は或は馬可傳一章十二節に「汝は我が愛子我が悦ぶ所の者なり」と譯せられ、或は馬太傳三章十七節に「此は我心に適ふ我が愛子なり」と譯せられたると同語であつて神の聖旨に適ふの意である、神の満足し給ふの意である、故に天軍の讚歌は之を言ひ換へて「天には榮光神にあれ、地には平和神の悦び給ふ人の中にあれ」と謳ふ事が出来る、而して神の悦び給ふ者は其獨子イエスキリストである、又凡てキリストに於て在る者、キリストの性を受けたる者である。而して斯く讀みて此歌は全然事實に符合するのである、平和は地にあるなし、然れどもキリストの靈を宿す者の衷に於て在る、之れ何よりも確實なる事實であ

る、世界は悉く戦亂の中に苦むと雖も獨りキリストに由て結ばれたる兄弟の間には藹々たる眞個の平和が存するのである、趣味の友又は利害の友の間の平和は破れるであらう、然れども神の悦び給ふ所の信仰の友の間に平和は永遠に動かないのである、人種の如何を問はず年齢の如何を問はず職業の如何を問はない、今や歐洲の天地に國は國と戦ふと雖も兩軍の兵士中陣中相見え^{まか}て堅く手を握り「吾が兄弟よ」と言ひて共に聖誕節を祝し得る幾多の基督者があるのである、キリストを迎へずして如何に努力するも永久の平和を獲得するの途あるなし、之に反して唯彼をだに迎へん乎、眞の平和は從て臨み來るのである。

然り平和は恵まれたる人の中にある、平和は基督者の心靈に於て在る、然し乍ら唯其れのみ止まる乎、天軍の讚歌の意味する所は獨り現在の事實に止まる乎、否、平和は現に基督者の心中に於て在り、而して又後には全世界に於て在るのである、「視よ汝の王汝に來る、彼は正義しくして救拯を賜はり柔和にして驢馬に乗

る、……我エフライムより軍車を絶ちエルサレムより軍馬を絶たん、戦争弓も絶たるべし、彼れ國々の民に平和を諭さん、其政治は海より海に及び河より地の極に及ぶべし」(撒加利亞書九章九、十節)、キリスト再び來り給ふ時平和は水の大洋を蔽ふが如くに全地を蔽ふに至るのである、今は少數信者の心靈的事實たるに過ぎざる平和が其時全世界の歴史的事實として實現するに至るのである、而して基督者の最後の希望は一に繋つて此點に存するのである、キリストに關する神の預言は既に悉く充されたるに非ず、否其最も重大なるものが尙ほ充されずして存つて居るのである、基督者は今尙ほ充されざる大希望の中に在るのである、而も此希望は漸く充されつゝあるのである、エルサレムの回復、猶太人の歸國等は皆其前徴である、かくて終に平和の主自ら平和を此地に齎らし給ふのである、平和は人間の努力に由て來るに非ず、主イエスキリスト之を齎らし給ふ、我等は唯信じて之を待つべきである。

是故に人よ、徒らに此世の風聲に心動かさるゝ事勿れ、露獨講和委員の會商何かあらん、元帥ヒンデンブルグの戰略何かあらん、首相ロイドジョージの演説何かあらん、大統領ウイルソンの教書何かあらん、平和は彼等の努力に由ては決して來らないのである、眞の平和は主イエスキリストの掌中に在るのである、政治家は恣のままに槍俎折衝を力めよ、新聞紙は好むが儘に時局の觀察を報ぜよ、然れども我等基督者は之に關しないのである、我等は千九百年の昔ベツレヘムの空に現はれし天軍の歌に神の聖旨を探るのである、而して眼を擧げて來るべき榮光の主を待ち望むのである、彼來り給ふ時新天新地は建設せられて眞の平和は海より海に及び河より地の極にまで及ぶのである。

平和、平和、世界の平和、是れ夢ではない、事實である、而かも軍隊と外交とに由て來る者ではない、神の子の再臨に由て來る者である、我等は忍んで其時を俟つ者である、マランアース、主よ臨り給へ！

身體の救拯

(一九一八年一月十三日柏木聖書講堂に於て)

我等も亦自から心の中に歎きて(神の子と成らんこと、即ち身體の救はれんことを俟つ(羅馬書八章廿三節)。

我等の國は天に實在す、我等は救主の其處より來るを待つ、即ちイエスキリストなり、彼は萬物を己に従はせ得る力に由て我等が卑しき體を化へて其の榮光の體に象らしむべし(腓立比書三章廿一、一節)。

美はしき語である、而して多くの信者は好んで之を誦するのである、然し乍ら彼等は果して此語の意味を解して居る乎、之を信じて而して愛誦するのである乎、抑も其の美はしきは何故である乎、蓋し驚くべき眞理が其中に含まれて居るからである、神の恩恵に與るに非ざれば解すべからざる極めて深遠なる眞理が其中に

含まれて居るのである、之を其字義通りに解して以て自己の信仰の基礎と爲すは信者に取て最も重要な事である。

凡そパウロの文體の常として一も贅言駄句あるを見ない、此語に於ても亦さうである、彼は先づ曰うた「我等の國（又は市民權）は天に實在す」と、自己の國籍を重んじ我が市民權は之を日本に於て或は英國に於て保有す、我が安全幸福は凡て此國家に繫るのであるとは今日文明國人の常に唱ふる所である、昔時ピリビ市に於ても亦同様であつた、殊に此市は羅馬の植民地にして異邦人中羅馬の市民權を有する者を移植して屯田制度を布きたるものなるが故に彼等は常に豪語して曰うたのである、「我は此地の土着人に非ず、我が市民權は海の彼岸羅馬の地に在り」と、是れ實に彼等が衷心の誇りであつた、而してパウロは幾度びか斯かる言をピリビ人の口より聞いたであらう、否パウロ彼自身も亦羅馬の市民權を有する一人であつた、然るにも拘はらず彼は彼等と相對して言うたのである、「汝等の市民權

は海の彼岸にあり、然れども我等基督信者の市民權は彼方天に於て實在す」と、即ち之を當時の語と對照して最も能く其の強さを知る事が出来る。

而して初代信者の信仰は實に之であつた、彼等は自己の一切の利害關係の繫る處を天に於て有つたのである、「我等の國は彼處に在り」と彼等は天を指して明白に斷言したのである、此信仰に全く弊害を伴はなかつたではない、然し乍ら此信仰あるに由て彼等の人生觀は最も非俗的非現世的となつた、彼等をして此世と斷絶せしめ富も權力も寸毫彼等の心に訴へざるに至らしめしものは此信仰であつた、彼等をして奴隸たると主人たるとの別なく貧富男女の差別なく凡て主にありて相愛する兄弟姉妹たらしめしものは此の信仰であつた。

然るに現代人の信仰は如何、現代の基督信者必ずしも天の事を思はざるに非ず、然れども彼等は畢竟半天半地的である、恰も商人が甲乙兩銀行に其財を托するが如く此方にして破産せん乎尙ほ彼方のあるあり以て其心を安んずるの類である、

斯の如くにして不徹底ならざらんと欲するも能はない、寔に不徹底は現代信者の一大特徴である、彼等の來世觀は甚だ曖昧である、彼等の現世に期待する所は甚だ多くある、彼等は國人に愛國者として迎へられんとする、社會事業を擧げて世人の讚辭に與からんとする、彼等は此世と共に進化せんとする、故に希望を此世に繋ぎ、此世の市民たるを以て大なる特權なりと信ずる、熱くもなく冷たくもなく不徹底極まる者にして現代の基督信者の如きはない、此時に當りパウロ其他初代信者と共に自己のインテレスト（利害）を悉く彼處に移し憚らずして「我等の國は天に在り」と斷言し得る者は果して何人である乎。

然し乍ら斯く言へばとて我等に取て植民地の如き此世と天の市民たる我等との間に全然何等の關係も無いと言ふのではない、此世の主權者は植民地を治めんが爲に自ら首都を去つて其地に到る事無しと雖も我等の救主は我等の本國より此地に來り臨むのである、救主とは誰ぞ、イエスキリストである、我等は今や彼の來る

を待ち望む、此世に於ける我等の生涯は無意味のものに非ず、是れ實に大なる待望の生涯である。

然り我等の生涯は待望の生涯である、パウロ始め新約聖書記者等は皆斯く教ふるのである、我等の救拯は決して既に完成したのでない、人或は救拯又は救濟と言ひて單に惡行者を眞人間と化せしむるが如き事實を意味する、而して曰ふ我は救はれたりと、或は更に他人をも救はんと欲すと、然し乍らパウロに在りては救拯とはかゝる小問題の謂ではなかつた、救拯とは何ぞ、曰く靈魂と共にする身體の救である、

たゞ此等のもののみならず聖靈の初めて結べる實を有てる我等も自ら心の中に歎きて子と成らん事即ち我等の身體の救はれん事を俟つ

唯に靈を救はるゝのみならず進んで身體をも救はるゝ事である、即ち靈に降りし豊かなる恩恵が更に身體に及びて之を朽ちざる聖きものと化せしめ、自由なる靈

が眞理を行ふに何の故障なき機關と成らしむる事之れである、靈の最も深き欲求を十分に發展せしめ且之を爲すに由て窮なき歡喜を感じしむる所の自由にして完全なる身體たらしむる事之れである、換言すれば此「卑しき體からだを化へてキリストの榮光の體かたどに象らしむる」事之れである、是に至りて我等は始めて神に肖かたどたる者となり(約翰書三章二節)眞の意味に於ての神の子と成るのである、是れ即ち救拯すくひである、而して萬物を創造し且之を支配するの力を有するイエスキリストが天より來りて此事を實現し給ふのである、其時迄我等の救拯は完成しない、我等は今かたは靈の質即ち見本を受けたるのみ、時到来ば神は此質かたに従ひて凡ての約束を充たし給ふ、我等は今正に其時を待ち望むのであると、パウロの救拯觀きうじやくかんは實に斯の如きものであつた。

近代人はかゝる説を聞いて必ずや笑うて言うであらう、是れ紳士淑女の知識階級に通用せざる論である、身體の救に何ぞキリストを要せし、醫者を以て足ると、

然し乍ら使徒パウロは爾う信じなかつた、其他の新約聖書記者等も亦爾う信じなかつた、而して凡て眞正なる基督信者はキリストに由る身體からだの救ひ以下を以て満足しないのである、何となれば彼等は其の靈の欲求を達成せんが爲に身體の不完全を痛感するからである、不十分なる健康は善を行ふに尠せうからざる障礙しょうがいたるを病者は知る、破損したる樂器は音樂家をして大なる苦痛を感じしむ、我等の不完全なる身體も亦到底靈の望に應ずるに足らないのである、信者は過去を顧みて自己の進歩を認むと雖も、之を繼續する事尙ほ五十年百年にして果して如何なる境地迄到達し得る乎、此身體にして一變せざる限りは畢竟五十歩百歩のみ、現在に比して全く性質を異にする完全なる身體を賦與せらるゝ時始めて眞の發展あり眞の自由があるのである、我等は皆かゝる超人ニヒルメンたらん事を希ふのである。

而して聖書は教へて曰ふ救主イエスキリスト來りて此事を實現せむと、斯くてこそ宗教は力ある宗教となるのである、イエスキリストは唯に我等の心を潔め給ひ

しのみならず、時到らば再び來りて此の卑しき身體をも其榮光の體に象らしめ給ふと知つて我等は最早や卑しき行爲に安んずる事が出來ないのである、基督信者の善行は此希望より來るのである、人或は曰はんパウロスく唱へてより既に千九百年なるもキリストは未だ來らざるに非ずや、其時の到來は果して何時である乎と、然し乍ら信じて待つは子たる者の特權である、好き土産を携へて歸り來らんとこの父の一言を信じて兒は只管に待ち望む、茲に言ふべからざる福がある、信する者が天父の約束の實現を待つが爲には千年二千年或は一萬年と雖も長からず、待望其事が大なる喜びである、やがて思はざるの時盜人の如くに彼は歸り來らむ、故に卑しき行爲を棄て、大なる希望の中に善行を力む、是れが真正なる基督信者の生活である。

初代の信者互に和睦む事篤かりしは何故である乎、之れ決して「汝等相愛すべし」との誠言に由るのみではなかつた、之れ其の希望を共にしたる事に由るのである故國を去る事遠き異境に在りて偶々同國人と相見えん乎、其懐かしさ言ひ難きものがある、蓋し其國を共にするの一事が彼等をして互に近づかしむるのである、信者は此地に在りて互に其國を共にし又其望を共にす、國は何處ぞ、彼處天に於てある、望は何ぞ、救主キリスト再び其處より來りて此卑しき身體に代へ御自身の復活體に似たる榮光の體を被せ給ふのである、信者皆均しく此國籍を有し此希望を有して相愛せざらんと欲するも能はない、信者の相愛も亦再臨の希望の産物である、愛せよと言ひて愛する能はず、望むべき大なる賜を與へられて愛は自ら湧き來る、之を評して實利主義と言は言ふべし、然れども斯く言ふ者自身が決して此法則より漏るゝ事が出來ないのである。

信者は既に救はれたる状態に在ると思ふは大なる誤謬である、既に救はれたるに非ず、更に大なる救を待ち望みつゝあるのである、靈の救拯に加ふるに身體の救拯ありて始めて完全に救はるのである、我等は大なる待望の中に在る、故に又

潔き待望的生涯を送るべきである。

救拯の完成

人格は靈と體とである、靈のみではない、又體のみではない、靈が體に伴ふて完全なる人格があるのである、其如く靈のみを救はれて救拯は完全ならず、靈と共に體が救はれて完全き救拯があるのである、而して神はキリストに由りて信者に新らしき靈に適する新らしき身體を與へ給ふて其の救拯を完成し給ふのである、而して靈の救拯は今行はれて身體の救拯はキリストの再臨の時に行はるゝのである、「愛する者よ我等今神の子たり、後いかな未だ露はれず、其の現はれん時には必ず神に肖んことを知る」とあるが如し、我等今朽つべき此身體を有ちて神に肖んと欲するも能はず、萬物を己に服はせ得る能を有し給ふ者に此卑しき體を其榮光の體に象らしめられて我等は始めて神の子即ち神に肖たる者となるのである。

萬物の復興

羅馬書第八章十六―廿五節の研究

(一九一八年一月廿日柏木聖書講堂に於て)

「我れ思ふに今の時の苦しみは我等に顯はれん榮に比ぶべきに非ず」(節十八)パウロは茲に苦しみと言ひ榮と言うて居る、「今の時の苦しみ」とは人世普通の艱難をいふのである乎、否パウロの場合に於て「苦しみ」とは單に其れ丈けの意味ではなかつた、使徒時代の信者には特別の苦痛が附き纏うたのである、即ち迫害である、而して獨り使徒時代のみならず此世は常にキリストに敵するが故に今日と雖も世に對して明白なる基督信者の態度を取る者には亦必ずや同じ迫害が臨み來るのである、今や多くの信者は信仰に十字架は附き物なりと聞いて驚く、然し乍ら之れ世の迫害の絶えたるが故に非ず、信者自ら之を避くるが故である、クリスチャ

ンがクリスチャンたるの行爲を爲す時は必然之に添へて適當なる苦痛を伴ふ、キリストと其榮を共にせんとする者が亦其苦しみを共にすべきは當然である、故に信仰進むに従ひ苦痛亦進む、迫害を味はざる今日の信者の耳にパウロの此語は特別の響きを有せずと雖も當時の信者に取ては非常なる慰藉の語であつたのである、今の時の苦痛は大なり、然れども之を後に顯はるべき榮光に比する時は言ふに足らずと、榮光とは何ぞ、是れ亦尋常一様の榮光ではない、天地萬物の復興と共に伴ふ信者の顯榮即ち是である。

天地萬物（受造者）は虚空に歸せらると云ひ破壊の奴隸なりと言ふ（十九節）、し難きが如くにして然らず、少しく天然人生に就て考察を費したる者は其の眞實たるを疑はないのである、春來りて花は咲き蝶は舞ふ、美はしきは天然である、然れども見よ、蝶の裏に厭ふべき毛蟲ありて葉を噛み枝を枯らすではない乎、猛鳥は小禽を捉へ野獸は家畜を襲ひ毒蛇は行人を惱ますではない乎、育成栽培幾百日に

して漸く蕾を破りしと思ふ間もなく花は慌しく泥土に委するではない乎、ゲートの歎じたる如く天然中の逸美たる婦人の容色も漸く二年を保たず、身體美の極度に達するや忽ち其敗壞の始まる事かの力士の全盛時代の甚だ短きに徴しても明かである、學者ハックスレー曰く「天然は完成するや否や破壊す」と、寔に天然物は敗壞の奴隸である、美はしきが如くにして其中に堪ふべからざる惡を藏し完全なるが如くにして實は極めて不完全である、虚空に歸せられたるは之れ受造者の眞相である。

何故天然は斯く虚空に歸せられ敗壞の奴隸として存つて居るのである乎、パウロ曰ふ其れには理由ありと、即ち「之に歸せしむる者に因る」のであると、天然を虚空に歸せしむる者は人である乎、或は然らむ、親の罪の子に顯はるゝが如く天然の首たる人の罪が萬物に顯はれたのであるかも知れない、然し乍ら之を歸せしむる者を神と見るは更に満足なる解釋である、即ち神は人類と共に萬物を救はん

と欲し而して前者の救拯の完成する迄暫く後者を不完全の儘に置きて待ち給ふのであらう。

而して敗壞の奴隷たるは天然自身の堪へ難しとする處である、虚空に歸せられて天然の衷に大なる苦痛がある、天然も亦かの盛装せる貴人の如くである、彼のみは苦痛を解せざるが如くに見えて實は然らず、美はしき皮一重を剥げば其下には言ふべからざる苦しみを宿して居るのである、天然も亦救を待ち望む、而して天然の救は我等の救と共に成就す、故に天地萬物は神の諸子の出現即ち基督者の救が其靈より體に及びて外側に顯はるゝ時を待ち望むのである、其時天地萬物が我等と共に神の諸子の榮なる自由に入る事を許さるのである(廿三節)。

故に我等が救を得たるは望に由るのである、既に救はれたのではない、望の中に救はれたのである、望既に實現せば最早や望ではない、望とは目的物の未來に存する事を意味する、我等の救の完成は未來に存す、聖靈我が衷に宿りて我れ神の

子たるを得しは即ち救はれたるなりと雖も救は之を以て完成したるに非ず、其の完成せらるゝ時は何時ぞ、我等の身體の救はるゝと共に亦天地萬物の救はるゝ時である(廿五、廿六節)。

事は極めて重大且つ深遠である、然し乍ら救若し是れ丈けのものでないならば其は救ではない、試みに現在の状態を以て救拯は終れりとせよ、その不完全なる事如何ばかりぞ、人は自己一人の救拯を以て満足する能はず、自己と共に妻子隣人否全人類の救拯を要求するのである、又人類のみの救拯を以て満足する能はず、人類と共に禽獸蟲魚否天地萬物の救拯を要求するのである、獨り我等の心中より惡の消滅するのみならず全人類全宇宙より其の消滅するに及びて始めてハレルヤアメンは我等の口に上るのである、而して聖書はかゝる救拯を我等に約束するのである、或る時迄待たば神は必ずキリストを以て完全なる救拯を爲し給ひ我等の愛する者は再び我等に返され、我等の聖き靈に適合ふ敗壞なき身體は與へられ又

天地萬物は改造せられて此新たなる身體を以て生活するに適する新天新地が實現せらるゝのである。

以て聖書の教ふる所の救拯の如何に宏大無邊なるかを知るべきである、之に比較して今日の所謂救済事業の如きは抑も何ぞや、或は一人の心中より悲哀が消失したりといひ、或は一工場の資本家が労働者に對して親切を増したりといひ、或は一農村が改善せられたりといひ、或は假に一國の民に平和が臨みたりといふとも神の我等に約束し給ひし完全なる救拯に比しては殆ど言ふに足らざる小事件である、我等の救拯は全宇宙のそれと共に完成せらる、此思想を抱きて人は全世界に福音の立證を爲さんと欲する大野心を起さざるを得ないのである、人の人格は其理想に由て異なる、エマソン曰く「汝の車を星に繋げ」と、然れどもパウロの如きは自己の理想中に全宇宙を抱擁したのである、而して彼の心に此希望の溢るゝありて全地は彼の傳道の區域となつたのである、又此理想を抱きて人は萬物に對

し無限の同情を寄せざるを得ない、自己一人救はるゝに非ず、全人類全宇宙と運命を共にするのである、是に於てか小なる自己中心の信仰は消滅して我が宗教は同時に又萬物の宗教となるのである。

再來の意義

イエスは今來りつゝある、而して最後に明白に人として來り給ふのである、來ると云ひ顯はると云ふ、隠れたる者の顯はるゝの意である、キリストは復活し昇天して人の目より隠れ給ひてより再び其榮光化されたる身體を以て世に臨み給ひつゝあるのである、而して時充つれば其自顯は極度に達して彼が天に昇り給ひし其状態を以て再び地に顯はれ給ふのである、故に再來はキリストの自顯であると同時に又地の進化である、地が彼を迎ふるに足る者と爲されて彼は之に臨み給ふのである、萬物の完成は神の造化の目的であつて又我等人類の理想である、而して再來は此目的の成就、此理想の實現に外ならないのである。

聖書の證明

基督再臨に關する主なる聖語

基督の再臨は余輩の信仰ではない、聖書の信仰である、余輩は之を高唱して聖書の高唱する所を反響するに過ぎない、最も有力なる基督再臨論は聖書其物である、故に其論據を探らんと欲する者は先づ第一に聖書に往かざるべからずである、聖書を措いて再臨を論ずるも無益である、之を信受するも排斥するも先づ此事に關し聖書が明示する所を精讀して後の事である、新約聖書丈けにても直接間接に再臨に就て記述する所は實に四百十八箇所の多きに及ぶと云ふ、余輩は今茲に悉く之を列記する事は出来ない、然れども其内最も顯著なる者を指示して讀者精讀の用に供せんと欲する、乞ふ一日の閑を取り、左手に新約聖書を持ち右手に色鉛筆^{いんえん}を採り余輩が示す聖語に畫線し、熟讀精讀して然る後に此重要問題に對する各

自の態度を定められん事を。(表中特に顯著なる者には圓點を附し置けり)

馬太傳 三章七節より十二節まで○五章三節より十二節まで○同十八節○六章十九節より廿一節まで○七章廿一節より廿七節まで○十二章卅六、卅七節○同四十四節より四十二節まで○十三章全體、殊に其三十節、三十九節より四十三節まで○十六章廿七節○十七章イエス變貌に關する記事、一節より八節まで○十九章廿八節○廿三章卅七節より卅九節まで○廿四章廿五章全部○二十六章二十九節○同六十四節。

馬可傳 八章卅四節より卅八節まで○十三章全部○十四章廿五節○同六十二節。
路加傳 一章卅三節○六章廿節より廿六節まで○九章廿六、廿七節○十二章八、九節○同卅五節より四十八節まで○十三章一節より五節まで○同廿二節より三十節まで○十七章二十節より三十七節まで○十八章七、八節○十九章十一節より廿七節まで○二十一章全部○二十二章十六節、十八節、廿九、卅節。

約翰傳 十一章に於けるラザロ復活の記事参考〇十四章一節より三節まで〇十七章廿四節〇廿一章廿二節、

使徒行傳 一章十一節〇三章廿一節〇十七章三十一節〇二十四章十五節。

羅馬書 二章五節より十一節まで〇五章二節〇八章十七節より二十五節まで〇十三章十一節より十四節まで〇十四章十一―十二節。

哥林多前書 一章七、八節〇四章五節〇七章廿九―三十一節〇十一章廿六節〇十三章十二節〇十五章廿三節〇同五十節以下〇十六章廿二節。

哥林多後書 五章一節より十節まで、殊に第十節に注意せよ。

加拉太書 一章四節〇五章五節〇六章九節。

以弗所書 二章四―七節〇四章三十節。

腓立比書 一章六節〇三章十一節より十四節まで〇同二十、二十一節〇四章五節。

哥羅西書 一章五節〇同廿三節〇同廿七節〇三章四節。

帖撒羅尼迦前書 一章三節〇同十節〇二章十九節〇三章十三節〇四章十三節より十八節まで〇五章一節より十一節まで〇廿三節。

帖撒羅尼迦後書 一章七節〇二章一―十二節。

提摩太前書 六章十四、十五節。

提摩太後書 二章十一―十三節〇四章一節〇同八節。

提多書 二章十一―十三節。

希伯來書 九章廿八節〇十章廿三―廿五節〇同三十六、三十七節〇十二章廿七、

廿八節〇十三章十四節。

雅各書 五章一節より九節まで。

彼得前書 一章全部、殊に五節、十三節〇三章九、十節〇四章七節〇同十三節〇

五章一節〇同四節〇同十節。

彼得後書 三章三節より十三節まで。

約翰第一書 二章廿八節○三章二、三節。

猶太書 十四、十五節○廿一節。

約翰默示錄 全書が基督再臨に關する記事である、特に再臨の福音と稱すべき書である、其内更らに顯著なる者を列記すれば、一章七節○三章三節○同十、十一節○六章十五—十七節○十一章十五節○十六章十五節○二十章十一—十五節○廿一章全部○廿二章十六、十七節○同二十節等である。

以上は大略に過ぎない、若し舊約聖書の證明を列舉せんには日も亦足りないのである、聖書中如何なる教義か斯くも饒多の證明を以て支持せらるゝ者あらんや、若し基督再臨が聖書の特に傳へんと欲する教義に非ずと云ふならば聖書は饒多の虚偽を傳ふる書なるが故に直に之を棄つるに若かずである、若し試みに聖書中より基督再臨に關する記事を削除するならば其大部分、而かも重要な部分が削除せらるゝのである、再臨信仰の維持は聖書保全の爲に必要である、再臨を否定し

又は嘲笑する者に對して余輩は問はんと欲す「汝聖書を如何せんとする乎」と、若し再臨が迷妄ならば聖書は迷妄の書である、故に今日直に之を棄つるに如かずである、再臨を斥けて聖書を保持せんとするは智識的正直を重んずる者の爲す能はざる所である、正直の人は漫に全般的冗辯を弄して真理の精確を覆はんとしないのである、信者は正直であるべきである、信仰の教師は殊に然りである、聖書の録す所の重要な記事を迷妄なりと稱して聖書を世界第一の書として世に推薦するは是を正直の人の業と認むることは出来ない。

而して單純にして偽はらざる人は再臨に關する聖書の記事を読みて疑はずして之を受くるのである、再臨の真理も聖書の傳ふる他の真理の如くに嬰兒の心を以てするにあらざれば解し得ざる者である、即ちイエスの言ひ給ひしが如くである「我れ誠に汝等に告げん、もし改まりて嬰兒の如くならずば天國に入ることを得じ」と(馬太傳十、八章三節)、而して信仰の嬰兒は平信徒である、其大人は教師神學者である、

純正なる平信徒は疑はずして聖書の言其儘を受くるに反し、近代神學に其思想を消みだされたる神學者等は之を受くる能はざるが故に種々に曲解して説明し去らんとするのである、改あらたまりて嬰あや兒ごの如ごとくになりて聖書を読みて基督再臨は其儘信ずることの出来る眞理である。

再臨と聖書 基督再臨問題は聖書問題である、聖書の神的權威を認めて再臨を否いなむことは出来ない、故に再臨を戲あざ譎げする者は聖書を貶へん斥せきするを常とする、例へば或る日本メソヂスト教會の牧師某は言ふた「聖書の天啓たるや論語の天啓たると其性質に於て異なる所はない」と、而して聖書に關する斯かる信仰が福音主義を標榜する所謂正統教會に於て公然唱道せらるゝを見て、余輩は再臨問題を以てする前に聖書問題を以て是等の教會と争ふの必要を認めざるを得ない、聖書と論語とは果して同じ性質の書である乎、教會よ余輩に答ふる所あれ。

基督再臨を信ぜし十大偉人

余輩がキリストの再來を高唱するとして余輩を怜あはれんで呉れる者がある、余輩は實まことに彼等に怜あはまるるが如き迷妄の徒であらう、然し乍ら世には余輩よりも優かに偉大なる人々の中に此信仰を懷いだきし者があつた、今茲に其十人丈だけを掲げやう。

其第一はオリバー・クロムウエルである。彼は何ど處どこ見ても英民族中第一人者である、彼れ微ひかりせば今日の英國も米國もなかつたのである、今や世界を民主化せんとて闘はれつゝある此戦争の主眼たる民主主義はクロムウエルの努力に由て確實に英民族の有いとなつたのである、而して此のクロムウエルが熱信なるキリスト再來の信者であつたのである、又彼の麾下もとに立ちて自由の敵を殲滅せし有名なる鐵アイ甲軍ロンサイズは主に再來信者を以て組織されたる者であると云ふ、有名なる「天路歷程」の著者ジョン・バンヤンの如きは其一人であつた。

其第二はクロムウエルの秘書官の役を務めし大詩人ジョン・ミルトンである。天才に於てシエイクスピアに及ばなかつたであらう、該博なる事に於てはゲーテに劣つたであらう、然し乍ら其道德的に深くして熱くして堅くありし事に於てはミルトンは優に彼等以上であつた、ミルトンは基督教詩人として第一位を占むべき者である、而して此人も亦彼の自由の戦友と同じく堅き再臨信者であつた、クロムウエルとミルトン、彼等は今日の日本の教役者等に^{おほ}かなるべき人物ではなかつた。

其第三はアイザック・ニュートンである。彼が近世科學の建設者中最大の者でありしことは何人も認むる所である、第一等の數學者にして理學者、彼を稱するに「迷妄」を以てする者は自個の迷妄を證する者である、然るに此大科學者が單純なる基督者であつて疑はずしてキリストの再來を信ずる人であつた、何んと奥床しいではない乎、引力説と二項式の發見者にして微分積分の完成者なる彼れニユ

ートンがキリスト再來の信者なりしとは！

其第四はマイケル・フハラデーである。彼は近世電氣學の卒先者中主たる者である、全く自修の人であつて彼れの發見に係る理化學上の原理は今なほ動かすべからざるものである、而してフハラデーも亦ニュートンと同じく單純にして熱心なるクリスチャンであつた、彼は Sandemanians と稱するキリスト再來を高唱せし小教派に屬し、其忠實なる信者として彼の一生を送つた、世界最初の電氣ダイナモを作りしフハラデーが熱心なる再來信者でありしと聞いて人は意外に思ふであらう。

其第五はヤコブ・ペーメである。彼は科學者に非ず其反對に神秘家であつた、而かも最も愛すべき敬ふべき人であつた、彼に由て神秘主義は^{ミステシズム}聖化された、彼の死は死の記録中最も美はしき者であつた、彼は死に臨んで美はしき天の音樂の鳴り渉るを聞いた、彼は家人を枕頭に招いて之を聞かしめんとした、曰く「汝等此音

樂を聞かざる乎」と、彼は終に窓の戸を開かして近隣の人をして等しく之を聞かしめんとした、曰く「斯くの如きの音楽、我れ獨り之を樂しむべからず」と、而して斯かる人がキリストの再來を信じたりと聞いて何人も異まない、神秘家は眞理の直感者である、彼の唱ふる所に大なるオーソリチーがある、ペーメは其名の示すが如く獨逸人である。

其第六はチンチエンドルフ伯である。彼は獨逸ビータスト(神聖派)の頭梁の一人であつて聖市ヘルンフートの建設者、モラビヤ派世界傳道の主腦として有名である、此基督教的大紳士は言ふまでもなくキリスト再來の高唱者であつた、彼の歌に事業に此信仰は明白に表はれて居る、而して過去三百年間に於て基督教的信仰の純潔なる者にして彼れチンチエンドルフ伯のそれに優つた者はなかつた。

其第七はアウグスト・フランケーである。彼亦神聖派の一人であつてキリスト再來の高唱者であつた、慈善家にして神學者、彼の建設に係る孤兒院は世界的に有名なものである、メソヂスト教會の始祖ウエスレーは大に此人に負ふ所があつた、フランケーの先輩はスペーネルであつてハレー大學の建設者と稱せらる、キリストの再來を迷妄なりと嘲ける者はハレー大學の起源を索ねて自個の迷妄を攘ふべきである。

因に曰ふ、哲學者カントの兩親も亦敬虔なる神聖派の信者であつた、哲學者自身は福音主義の信者ではなかつたが、彼を育てし家庭は再來を待望せし家庭であつた、カント哲學の英國のヒューム哲學、佛國のボルテイヤ哲學と全然其素性を異にして神を敬ひ聖徳を重んずる者なるを知る者は、其泉源の如何なる信仰に於てありし乎を知るであらう。

其第八は英國のジョージ・ムラーである。世界最大の孤兒の友であつて、我國の石井十次氏を起たしめしも此人であつた、ムラーはブリマス派の熱信家であつた、而してブリマス派の中心は其キリスト再來の信仰に於て在るのである、彼れムラ

1の信仰より此の信仰を除いて彼の信仰はなかつたのである、獨逸に於てはアウグスト・フランケ、英國に於てはジョージ・ムラー、揃ひも揃ふてキリスト再來の信者であつて大なる孤兒の友であつた、再來の信仰は迷妄ではない、實際的眞理である。

其第九はトレデレスである。プリマス派の信者と云へば悉く熱狂家の如くに思はるれども、茲に冷靜なる學者として此人があつたのである、新約聖書原文校訂の業に従事せし者は皆善くトレデレスの名を知るのである、注意深き精密なる聖書學者として彼は錚々の聞えある者である、而して彼も亦キリスト再臨の信者であつたのである。

其第十はベンデルである。ベンデルを知らずして新約聖書の解釋を語るべからずである、彼は實に近世聖書解釋の祖先である、彼は特にキリスト再來の高唱者であつた事は著名なる事實である、彼は再來の一八三八年に有るべきを計算して其

當らざりしが故に大に嘲笑家の嘲笑を招いた、然れども誤算は誤算である、人、何人か誤算なからざらんや、殊にキリストの再來なる歴史的最大事件に關して誤算は最も有り易き事である、然れどもベンデルの聖書解釋の原理は誤らなかつた、彼の GNOMON (解釋指南)は永久的大著作である、嘲笑者は須らく三年の時日を消費して此書を消化すべきである、彼等にして若し其忍耐と腦力とあらば彼等は再び嘲笑を敢てしないであらう。

尙之に加へて余輩は米國の神學者なるモーセス・スチュアートの名を掲げんと欲する、彼は現今の米國宗教家とは全然其素質を異にし、該博であつて深遠であつて、嚴正であつて殊に硬骨であつた、彼は終生ドクトルの稱號を拒んで之を受けなかつた、該博の智識に加へてナザレのイエスの謙遜なる弟子であつた、而して熱く昇天せるイエスの再び來りて世を統治^{すべし}め給ふ事を信じた、かの俗化墮落せる米國にも一時は斯かる信者があつた、モーセス・スチュアートを以て代表せられし

米國神學者は健全にして尊敬すべき者であつた、而かも彼の裔すまは今は絶えんとし残りし者は金主々義と民主々義との謳歌者のみである。

序に曰ふ、キリスト再來の信者に非ずして其嘲笑者なる者は米國現時代表的神學者シカゴ大學神學部長ドクトル・シエラー・マツシウである、彼は近頃一書を著し縦横に此信仰を罵倒して居る、我國の嘲笑者にして更に其嘲笑を繼續せんと欲する者は、博士に就て更に嘲笑の材料を得べきである、題して“Will Christ Come Again”(基督は果して再び来る乎)と云ふ、一本を購ひて讀みて攻撃の武器とせよ、余輩は反對者に此武器を紹介して憚らない。

以上十人である、余輩は其數を十倍することが出来る、然し今は十人で充分である、クロムウエルとミルトン、ニュートンとフハラデー、ベンゲルとトレグレス、フランケーとムラー、彼等の如何に偉大なりし乎を知る人に取りては是れ重き證

明である、彼等の今日の我國の新神學者等におぼれ憚るべき人物でない事は世界の舉りて知る所である、憐む者憐まるべきではない乎、余輩はクロムウエル、ミルトンと共に新神學者等に憐まるゝ事を以て大なる名譽なりと信ずる、余輩は獨り嘲けらるゝのではない、是等の福音の大證明者等と共に嘲けらるゝのである、基督教は素々もとく此世の智者達者より嘲けらるべき宗教である、其建設者の奇跡的出生、其奇跡に満ちたる生涯、其復活昇天再來を信ずる宗教である、嘲けられずして何ぞやである、嘲けられざる基督教は奇怪あやしき基督教である、かの「科學的」にして「合理的」なる基督教は世に嘲けられざる代りに罪人をして其罪を悔改めしむるに於て何の効果なき基督教である、此世の學者等の立場より見て凡ての宗教が迷信である、激烈に嘲けられてこそ宗教は宗教たる其眞價を發揮するのである、嘲けられて我は始めて眞理を握りし實證を得るのである。

附記 ニュートンが單統なる聖書其儘を信ぜし基督者なりしことは多くの學者

基督再臨を信ぜし十大偉人

を礙かせた、彼等は如何しても其説明を得ることが出来ないのである、然し乍ら余輩を以て見れば是れ決して解し難い事ではない、ニュートンは深い科學者でありしが故に能く科學の能力を知つたのである、科學を以て知り得る事と知り得ざる事とを知つたのである、故に彼は科學を正當に利用して之を以て其勢力範圍以外の事に立入らなかつたのである、故に彼の心は常に平靜であつて彼の頭腦は常に明晰であつたのである、彼は究むべきは學者として究め信ずべきは信者として信じたのである、故に彼は常に幸福であつたのである、フハラデーの如き亦同型の人であつた、理學者チンダール一夕彼と夕飯を共にし大化學者が燻製の鱈一尾とパン數片より成る其簡單なる食膳の上に發せし熱信なる感謝の辭に一驚を喫したりと云ふ、大科學者は大なる小兒である、彼等はパウロと共に信ずべきは凡ての事を信じ得るのである、彼等は實に恵まれたる人等である、而して最も怜むべきは科學の何たる乎を知らずして、科學科學と唱へて科學を迷信する宗教家等である。

余がキリストの再臨に就て信ぜざる事共

○余は今キリストの再臨を信ずる、然し乍ら再臨を信ずる人々が之と共に信ずる凡の事を信じない、例へば余はキリストが何年何月何日と時日を定めて再臨し給ふとは信じない、其事に就てはキリストの明訓がある、彼は言ひ給ふた「其日其時を知る者は唯我父のみ天の使者も誰も知る者なし」と(馬太廿四章三六)、今日まで爲されしキリスト再臨の時日の計算は悉く誤算であつた、最近に多くの再臨信者は一九一七年九月十七日に再臨あるべしと信じ彼等の内其準備を爲した者もあつた、然れども其日も亦其事なくして過ぎた、有名なる聖書學者ベンゲルさへも此事に就ては大なる誤算を爲した、彼は彼の該博なる聖書知識に基き一八三八年を以てキリストの再臨あるべしと推定した、而して其事なかりしが爲に一時は彼の聖書知識の全部までが信用を失した、神は再臨の時日を秘し給ふ、而して神の秘

し給ふものを人が探らんと欲してはならない、我等は神の定め給ひし時に必ず再臨があると信ずる、其事が今年あらうが明年あらうが、十年後にあらうが、百年後にあらうが、或ひは更らに遠く千萬年の後にあらうが我等の關する所でない、余はキリストが我れ必ず汝に臨るべしと約束し給ひし其貴き御約束を以て満足する、彼が「我は速に臨らん」と言ひ給ひしは或は不意に臨らんと意である乎も知れない、縦し又千年二千年の後であるとするも千年を一日の如くに見做し給ふ神の眼より見て之を「速に」と稱して少しも差支はないのである、余自身は時の休徴より察して再臨は頗る迫りつゝあると思ふ、然し是れ余の觀察に過ぎない、其日其時は唯天父のみ之を知り給ふ、天の使者等も何人も知る者はない、而して知らざるが福である、知らざるが故に勤みて待望むのである、神が御自身を愛する者に約束し給ひし人の眼未だ見ず人の耳未だ聞かざる大恩惠大榮光の出現を待ち望む事、之に優さるの快樂はない、待つは子たる者の取るべき態度であつて彼に取り

大なる特權、大なる幸福である、余が今特に祈求めて止まざるものは忍んで待ち望むの心である、是れさへあれば余は墓に下りて千年萬年余の救主の再臨と之に伴ふ余の身體の復活を待つことが出来る。

○余は又多くの再臨信者が爲すが如くに黙示録第二十章六節に「彼等(信者)は神とキリストの祭司となりキリストと共に千年の間王たるべし」とある記者の言葉を文字其儘に解することは出来ない、黙示録は表號的文章である、其中にありては三は天の數であつて天の事を示し、四は地の數であつて地の事を示す、其他此書に在りては數字は或る原理を示すのであつて、數を示すのではない、此事は註解者の大抵一致する所であると思ふ、故に此所に千年とあるが故に百年を十倍する千年であると解するは頗る危険なる解釋法であると思ふ、又信者がキリストと共に或る年限の間王たるべしと云ふは再び此地に現はれて其政權を握ることである乎頗る疑問である、熱心なる再臨信者にして此事を信ぜざる者は尠くない、

再臨其事が超現世的事實である、其結果として現世其儘の統治が行はれやうとは思へない、少くとも余は此事に就ては無知を告白する、此事に關する余の立場は米國ケンタッキー州ルイスビル市の學者フランク・M・トマス氏の著 THE COMING PRESENCE (再臨論) に現はれたるものと同じである。

○余は又或る再臨信者が爲すが如くに所謂「神癒」を信じない、勿論再臨を信ずる必然の結果として思想は統一せられ、信仰は高めらるゝに由り、祈禱は自から熱心を加ふるに至るが故に、肉體の健康も亦自から増進するに至るは余の疑はざる所である、然ればとて醫術は惡魔の發見なりと唱へ、醫療は不信の罪なりと稱するは余の同意する能はざる所である、余はキリスト再臨を以て天然に反する事なりと信ずることは出来ない、是れ又天然の要求する所、パウロの言辭を以て言ふならば「受造物みづから敗壞の奴たることを脱れ、神の諸子の榮なる自由に入らんことを許されんと望を有たされたり」とある其事である(羅馬書八、二十一)、故に天然

の法則に従つて疾病を癒さんと努むる近世醫術は其原理に於いて決して神の聖意に反る者でない、勿論之に多くの弊害の伴ふのは余と雖も十分に認むる所である。

○キリストの再臨とはキリスト御自身の再臨である、是は聖靈の臨在と稱する事とは全然別の事である、又之と同時に死せる信者の復活があり、生ける信者の携擧があり(テサロニケ前、書四章一七節)、天國の事實的建設が行はる、即ち再臨がありて天國が現はるゝのであつて、人類の自然的進化、又は社會の改良、又は政治家の運動に由て神の國は地上に現はるゝのではない、余は今此等の事を疑はずして信ずるを得て神に感謝する、即ち余は今所謂 Pre-millennialists (先づ再臨ありて然る後に神の國の出現ありと信ずる者) の一人であつて Post-millennialists (再臨は神の國の完成の後でありと信ずる者) の一人ではなす。

祈禱の効驗

米國の商人にして余の終生の友人なるダビッド・シー・ペル氏は余がキリストの再臨を信ぜんが爲に一日も缺かすことなく三十年以上祈り続けたと云ふ、而して今や彼の祈禱が聽かれ神が余の靈眼を開き給ひて余は再臨を信ずるを得て萬物余に取て盡く新らしく成るに至りて余は祈禱の偉大なる効力を信ぜざるを得ないのである、神學者の提供する如何なる議論も余をして基督教の此中心的教義の眞理に關して確信を起さしむるに足らなかつたであらう、而かも議論の爲す能はざる事をその聖者の一人の祈禱に應へて神の靈は成就^{まじ}給ふたのである、驚くべきは信仰の祈禱の能力である、以上は余に如何にして余はキリストの再臨を信ずるに至りし乎と問ふ者に對して余の與ふる答である

基督再臨問題講演集 終

大正七年十一月七日印刷
大正七年十一月十日發行

基督再臨問題講演集
定價六十錢

著者	東京府豊多摩郡澁橋町柏大九百十九番地 内村 鑑三
發行者	東京市神田區南神保町十六番地 岩波茂雄
印刷者	東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 中田福三郎
印刷所	東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舎第一工場

發行所

東京市神田區
南神保町十六番地

岩波書店

電話 本局一四〇
振替東京二六二四〇

21170

内村鑑三主筆

聖書之研究

純粹なる基督教雜誌なり、純聖書的福音を唱ふ、贖罪と復活と基督の再來とを高唱す、所謂現代人の所謂自由神學に反對す、創刊以來十八年に達す、誠實なる讀者を海の内外に有す、毎月一回十日發行、一冊に付金拾五錢、一年分(十二冊)金壹圓五拾錢、郵税を要せず、すべて前金の事

發行所

聖書研究社

東京府下流橋町柏木九一九

振替口座七四九八

神學博士 トマスリンゼー著
法學士 藤井武譯

ルーテルの生涯及業

再版
中判 箱入
價壹圓三拾錢
送料金八錢

法學士 藤井武著

新 生

切品
價五拾五錢
送料金六錢

ハインリチ原著
文學士 石原謙共譯
法學士 山谷省吾譯

原始基督教

初版
中判 布裝
價壹圓二拾錢
送料金八錢

文學士 石原謙著

宗教哲學

四版
中判 布裝
價壹圓五拾錢
送料金八錢

宮川巳作著

初版
中判 布裝
價壹圓二拾錢
送料金八錢

發行所

岩波書店

東京市神田區南神保町

振替東京二六二四〇

終